

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。
■文中で旧 URL(<http://www.nougyou.kitakami.iwate.jp/agri/>) を記載している場合、新 URL(<http://i-agri.net>) に読み替えてください。

夏秋きゅうりの果実に見られる炭そ病の特徴

近年、本県の夏秋きゅうりでは炭そ病が多発傾向にあり、果実被害も見られている。果実病徴は、黒星病や斑点細菌病と類似しているが、黒星病とは病斑の大きさや形、かびの色で、斑点細菌病とは細菌液が出ない点で異なる。果実病徴で診断が困難な場合、茎葉の病徴や発病部位、圃場の発生状況、発生時期や気象要因等を考慮し、総合的に診断する。

1. 巡回調査における発生状況

- (1) 夏秋きゅうりの果実に見られる病害は、黒星病と斑点細菌病が知られているが、近年、炭そ病が多発傾向にあり(図1) 果実への被害も見られている。
- (2) 今年度、巡回調査圃場の80%で果実に何らかの病害が見られており(図2) 果実に見られる病徴が類似しているため生産者は診断に苦慮している(図3)。
- (3) 巡回調査圃場において、果実の炭そ病を黒星病と誤診し、薬剤選択と防除のタイミングを誤り被害が拡大している事例が見られた。

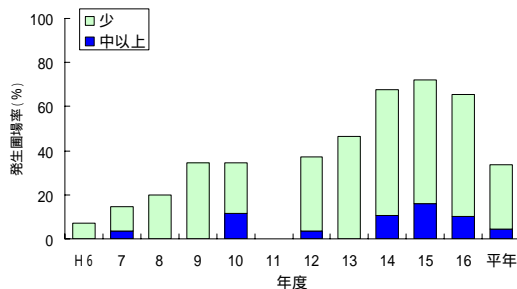


図1 炭そ病の年次別発生推移(8月下旬)
程度(発病率): 少(~25%)、中(26%~)

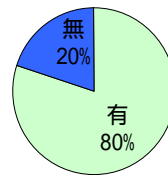
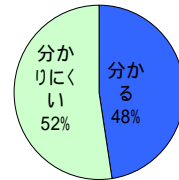


図2 果実病害の発生有無 図3 果実病害の診断状況
(巡回調査地点対象農家アンケート)



2. 診断のポイントと類似病害との見分け方

(1) 果実の病徴

炭そ病



炭そ病は、大きく縦にへこんだくぼみに鮭肉色のかび(分生孢子)を生じる。

黒星病



幼果の病徴

黒星病は、炭そ病よりも小さくくい込んだくぼみに緑黒色のかびを生じ、炭そ病や斑点細菌病よりも幼果に発病しやすい。

斑点細菌病



斑点細菌病は、炭そ病に見られるようなかびを生じず、水浸状の小斑点から白いヤニ状の細菌液を生じる。

(2) 茎葉の病徴

炭そ病



葉の病徴



生長点の病徴



生長点の枯れ



茎の病徴

炭そ病は、葉に中心部が白色で周辺が黄褐色の葉脈に区切られない円形病斑が見られ、茎には縦にくぼんだ黄褐色の病斑が見られる。

黒星病



生長点の病徴



茎の病徴

黒星病は、炭そ病のような大きな展開葉ではなく、生長点の付近の葉に黄～暗褐色の穴が開き、茎には暗褐色の水浸状にくぼんだ病斑が見られる。

斑点細菌病



典型的な病徴



伸展停止した病徴

斑点細菌病は、葉に炭そ病のような円形ではなく黄褐色の葉脈に区切られた四角く透き通った病斑が見られる。茎には、果実と同様の病徴が見られる。

(3) 果実以外の発病部位と圃場の発生状況

炭そ病は、株の中位葉に発病し、発病葉付近の生長点、茎や巻きひげへ感染し発病する。発病した生長点は、枯れることもある。圃場では初め株ごとに見られるが、その後発病株を中心に広がり、圃場内へ蔓延し枯れ上がりの要因となる。

黒星病は、株の生長点・茎・巻きひげ・葉柄に発病し、圃場全体に見られる。本病により枯れ上がることはないが、生長点は枯れることがある。

斑点細菌病は、株では炭そ病よりもやや下の中下位葉へ発病し、茎にも見られることがある。圃場では炭そ病と同様に株ごとに見られるが、枯れ上がることはない。

(4) 発生時期と気象要因

果実に見られる病害は、7月中旬頃までは黒星病か斑点細菌病であるが、それ以降は炭そ病も見られる。

発病しやすい気温は、炭そ病は黒星病や斑点細菌病よりも高め、黒星病は低温、斑点細菌病はその中間である。各病害とも多湿条件下で発病しやすい。

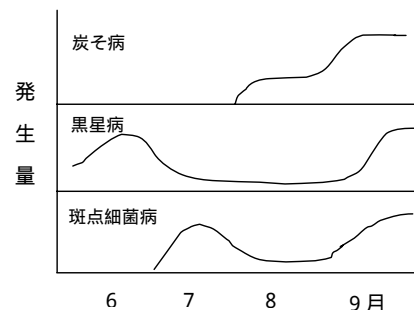


図4 各病害の発生消長(模式図)

3. 診断および防除の留意点

(1) 上記以外で果実に奇形が見られる場合、生理障害やウイルス、他の病害虫等の要因を検討する。また、正確な診断には、検鏡等で確認することが望ましい。

(2) 防除は、病気の発生時期や気象条件、発生状況等に応じて行う。詳細は、病害虫発生予察情報を参照する。